

外部環境の変化に対応した 420年にわたる事業の変遷

当社グループは、住友グループの源流事業を受け継ぐ企業として、その事業精神に基づき外部環境の変化に柔軟に対応するとともに積極進取の姿勢で事業を推進してきました。その過程におけるさまざまな課題の解決や経営判断によって当社グループの現在の強みが形成されています。今後も事業活動を通じた強みのさらなる強化、醸成に努めていきます。



文殊院旨意書

住友家初代政友(1585年~1652年)が晩年、商人の心得を説いた文殊院旨意書は、冒頭文のほか五ヶ条にわたって商売の心得に加え、人間の努力や誠実さを求める内容にもなっており、住友事業精神の源となっています。



冒頭文では、「何事も粗略にせず、すべてのことについて心を込めて丁寧慎重に励むように、人間を磨き立派な人格を醸成しなさい」ということが、そして最後の項では、「他人がどのよう

なことを言っても短気になって言い争うようなことはせずに、繰り返し詳しく説明するように」と人と接する場合の心がけや説明責任(アカウンタビリティ)について記されています。

この文殊院旨意書に始まる歴史と伝統を引き継いで、初代総理事 広瀬幸平が中心となり、住友の基本となる理念を示したものが住友家法であり、さらに核心部分を営業の要旨として著したものが住友事業精神です。

SMMグループでは、従業員の共通理念である住友の事業精神をはじめ、業務遂行の道しるべとしての行動基準、目標などについてさまざまな機会教育の場で従業員との共有を図っています。

南蛮吹き

戦国時代が終わり、平和が訪れた日本では、仏具などへの銅の需要が大きく高まりました。このような中、京都で銅事業を始めた蘇我理右衛門は「南蛮吹き」という銅と銀を分離する製錬技術の開発に日本で初めて成功しました。当時、銅鉱石の中に含有される銀を抜き出す技術は日本にはなく、銅は銀を含んだまま銅の価格で販売、輸出されていましたが銀を分離して販売することを可能にしました。



また、元和9年(1623年)に物流の効率化を目的として、港のある大坂に銅吹所(製錬所)を開設しましたが、この製錬技術を独占することなく広く同業者へ公開することで大坂には銅関連の事業者が多く集まり、世界でも有数の銅の町となりました。世界的にも当時の日本の産銅量は非常に多く、かつ外観がローズレッド色で美しかったことからジャパンカップパーとして珍重され、オランダの東インド会社の手により世界中に輸出されていました。元禄10年(1697年)、日本の産銅高が約6,000トンで世界一になりました。その時の約4分の1を別子銅山の銅が占めていました。SMMグループでは、ものづくりの会社として、常に技術を磨き続け本業を通じた持続的な成長と企業価値の最大化を図っていきます。

主なできごと

1602 オランダ東インド会社設立

1760年代 産業革命

1867 ノーベルがダイナマイトを発明

1923 関東大震災

1939 第二次世界大戦勃発

1951 サンフランシスコ講和条約調印
1955 日本、GATT(関税貿易一般協定)に加盟

1961 電気ニッケルの貿易自由化

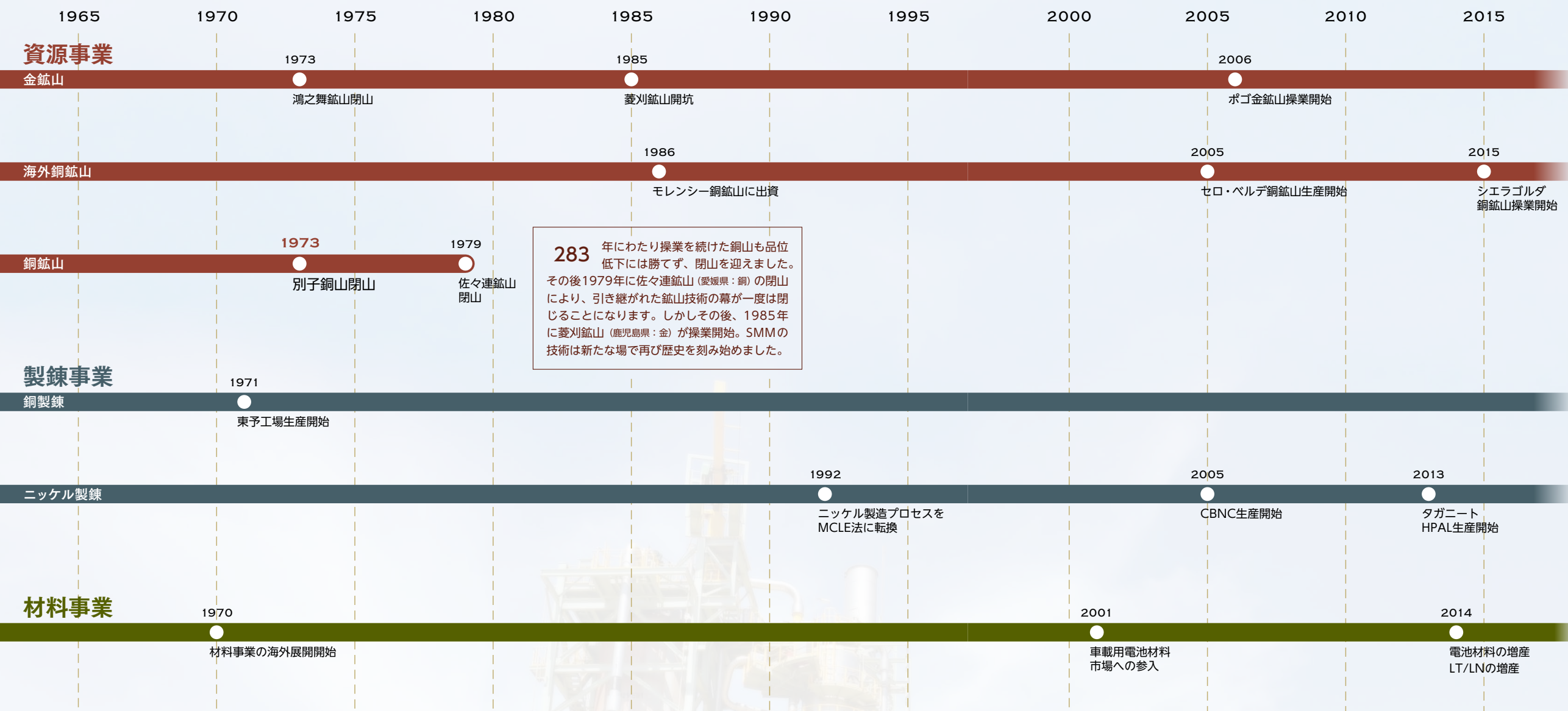
1603 江戸幕府開設

1775 アメリカ独立戦争

1869 スエズ運河開通

1914 第一次世界大戦勃発

1929 世界大恐慌



283 年にわたり操業を続けた銅山も品位低下には勝てず、閉山を迎えました。その後1979年に佐々連鉱山（愛媛県：銅）の閉山により、引き継がれた鉱山技術の幕が一度は閉じることになります。しかしその後、1985年に菱刈鉱山（鹿児島県：金）が操業開始。SMMの技術は新たな場で再び歴史を刻み始めました。

植林事業

別子銅山の稼行に必要な炭や材木の確保のため、長年に渡り別子山中の山林の伐採が行なわれ続けたことで、森林は広範囲にわたって消失していました。この荒れ果てた姿を見た2代総理事 伊庭貞剛は、「別子の山を荒蕪するにまかしておくことは、天地の大道にそむくのである」、「もとの青々とした姿にして、これを大自然にかえさねばならない」との大方針を立て、専門技術者を招いて造林計画を作成、植林事業を進めました。それまでの15年間の年平均約6万本の植林から、別子銅山支配人に就任した1894年には、約12万本、

3年後の1897年には年間100万本を突破し、その後も毎年本数を増やし続け、ピーク時には毎年200万本を超える植林を行ないました。この事業は伊庭貞剛退任後も引き継がれ、現在では、100年以上も前に緑枯れ果てた別子銅山がもとの緑豊かな山林に回復し多様な生態系を育んでいます。SMMグループでは、大規模な環境影響を与える資源事業の鉱山開発をはじめ、製錬事業、材料事業の各事業拠点においても環境保全活動などを通じ、地域との共存共栄に努めています。

旧別子銅山



現在の別子銅山

煙害の克服

別子銅山の近代化により、出鉱量の拡大が図られ、別子山中にあった製錬所は新居浜の沿岸部に移設されました。その結果、明治26年(1893年)、製錬によって生じる亜硫酸ガスによる周辺の農作物への被害が深刻化しました。そこで、2代総理事 伊庭貞剛は、新居浜市の北方20kmほど離れた水も出ない無人島だった島を買取り、製錬所を移設したのが後の四阪島であり1905年のことです。しかし、当初の予想に反し四阪島からの



煙害が広範囲に拡大したため、賠償金の支払いに加え、当時の企業の対応としては珍しく農作物への被害低減のために生産調整まで行ない続けました。さらに世界中の銅製錬工場が同じ問題を抱えていた中、膨大な研究費と長い期間をかけ1939年、煙害の根本原因であった亜硫酸ガスの排出ゼロを世界に先駆けて実現し、47年にわたる煙害問題を完全に解決しました。SMMグループでは、フィリピン国などの海外の事業拠点においても、環境保全などに努めるとともに地域振興策への支援などを通じ地域社会との信頼関係を構築・維持し、共存共栄を図っています。

【SMMグループの強みの源泉】
● 地域社会との信頼関係

420年にわたって
培ってきた
7つの強み

磨き続けてきた技術

事業精神と目標を
共有する従業員

ビジネスパートナーとの
強固な関係

顧客との良好な関係

地域社会との信頼関係

安全な労働環境

健全な財務体質

創造される価値

資源の確保と基礎素材や
高機能材料の安定供給による
持続的成長

地球環境の保全や
環境低負荷製品の開発、
地域社会との共生による
持続可能な社会への貢献

主なできごと

